

入選

父は「親切」の模範解答

福井県 東浦中学校

三年 木下 那奈

知らない間に、いろいろな親切をしている。気づいた誰かに、お礼を言ってもらえるかどうかもわからないのに。それが私の父だ。

父は常に、親切なことをしている。例えば、学校の草刈り。暑い日でも、高い場所でも、草を刈っている。誰かに「やってほしい」と言われているわけでもないのに、草を刈っている。そして、除雪。学校の通学路の除雪を朝早くから一人でしている。

そのことを、友だちは知っているのだろうか。通学路だけではない。福井市に住んでいる、祖父母の地区全体を除雪したのだ。福井市は、私の住んでいる敦賀市よりも雪が多く固い。それでも、夜中から朝にかけて、一人でやっていた。

私は、いっしょに行って手伝うことができない。夜中に起きられないし、あぶないと言われるからだ。いっしょに手伝いたいという気持ちは、自分でも良いことだと思う。しかし、私には悪いところがある。

「ありがとう」とははっきり言えないことだ。恥ずかしくて言えない。父は、礼を言われると、自分も恥ずかしくなる性格だと母から聞いた。だから、別に言わなくてもよいと考えてしまうのだ。

一人で朝早くから除雪をし、どれだけ暑い日でも草刈りをしている父に、「ありがとう」は絶対言わなければならない。だから私は、「いつもありがとう」と父に言った。父は照れていたが、「ありがとう」と言えてよかった。

あるとき、父が写真を見せてきた。笑顔のおじさんと、父の写真だった。そのおじさんは、大雪の日に敦賀から福井までの約50キロメートルを、歩いて行こうとしたらしい。それを父が見つけて、あぶないからということで、車に乗せて送っていった。

また親切をしている。「なぜ、そこまで」というような複雑な気持ちになるが、人助けをしたという話を聞くだけで、心が温まる。私も大人になったら、そんな親切をあたりまえにするような人になりたいと思った。さらに父は、積雪のせいで止まってしまったバイクも助けたそう。親切をしない日など、ないのではないかと思った。

私は、今からでもできる親切がないかと考えた。「そういえば」と思い出したのが、父がいつも掃除している、用水路のように細い川だ。その川は、学校のすぐ前に通っていて、海にごみが流れないように止める柵が置いてある。

その柵には、いつも落ち葉やごみが引っかかって、川の水があふれそうになっている。それらのごみを掃除して、水の流れをよくしている。大雨が降れば、柵が掃除されていてもあふれている。掃除をしなかったら、もっとあふれているのだろう。

それくらいの掃除なら私にもできる。だから私は、今できる親切は川の掃除だということに気づいた。誰かに「ありがとう」と言われるためにするのではない。誰かが心地よく過ごせるようにするために、親切をするのだ。

だから私は、あたりまえに親切ができる父のような人になり、小さな親切から始めたい。